

に ソーラー

玄海原発をめぐる「やらせメール問題」などが発覚した佐賀県の古川康知事。自身に減俸処分を科し、嵐が過ぎ去るのをじっと待っているとの評判だが、そんななか着々と進めるプロジェクトがある。中心部が国の特別史跡に指定されている「吉野ヶ里遺跡」の約16%にソーラーパネルを敷き詰め、太陽光発電を行う「メガソーラー」事業だ。露呈した「原発屋」のイメージ払拭策との声もあるが、地元では「なぜ吉野ヶ里に！」と疑問や反対の声も根強い。

【ルポライター・毛利甚八】

開花宣言から約1カ月。葉桜の頃、筆者は現地を訪ねた。既に造成工事は始まっており、遺跡調査後は原っぱとなっていた土地には、柵が張り巡らされていた。黄色い重機があちこちで土を掘り起こし、ひっきりなしにダンプカーが出入りしている。

土の下に埋まっている弥生時代の遺跡はどうなってしまうのだろうか？「なぜここに」という声が、初めて実感として届いた。

プロジェクトは昨年6月、古川知事自らが県議会で表明した。少し長いですが、その肉声を議事録から再生する。

〈佐賀県は、石炭採掘、火力発電や水力発電、原子力発電と、常にエネルギーの最先端を歩き続けてきた歴史があり、今後のエネルギー政策においても、全国のモデルとなるような存在でありたいと考えています。そこで、本県がトッププランナーである住宅用太陽光発

電はもちろん、事業所用太陽光発電や大規模太陽光発電施設（メガソーラー）の普及についても積極的に取り組み、日本の「太陽光王国」を目指したいと考え

吉野ヶ里ニュー・テクノパーク跡地とは、弥生時代の環濠集落が復元された「国営吉野ヶ里歴史公園」北側に広がる、佐賀県土地開発公社の元所有地。企業誘致がかなわず、中ぶらり人になっていった土地でもある。

そもそも吉野ヶ里遺跡で大規模な環濠集落が発見されるきっかけは、一帯の工業団地計画だった。1985年から、佐賀県七地開発公社が神崎市と現・吉野ヶ里町にまたがる一帯67・6

89年2月、遺跡を視察に訪れた考古学者の佐原真氏（当時・奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部長）は、「吉野ヶ里遺跡は『魏志倭人伝』の、卑弥呼の宮殿の記述に符合する部分がある」と評価。

「すわ！邪馬台国か」と新聞やテレビが大々的に報じたことで、一気に全国的な注目を浴び、この年、年間百万人もの見学者が発掘現



太田記代子・元佐賀県議



佐賀県教育庁文化財課・森田孝志副課長



佐賀県新エネルギー課・古賀信幸副課長

メガソーラー計画とは？

年から佐賀県教育委員会が文化財調査に入った。「普通、遺跡調査は少しずつしか進められない。少し掘っては埋め戻して開発者に渡し、次の場所を掘る、という例が多い。ところが吉野ヶ里の場合、3年もかけて一度に広範囲を発掘できたわけです。そのおかげで、弥生時代前期から後期にかけての大規模な集落跡がいくつも出た。遺構の全体が見渡せたことで、すごい遺跡だと分かったのです」（佐賀県教育庁文化財課・森田孝志副課長）

遺跡は弥生時代の環濠、高床倉庫群、望楼、住居、墓地のほか、奈良時代の巨大建物群や駅路跡（古代の幹線路）などが含まれていた。出土品は主なもので、銅剣、ガラス製管玉、甕棺、顔面に朱がついた人骨、絹の布片、巴形銅器、青銅器の鋳型、ゴホウラの貝輪など。土器にいたっては膨大な量が出土した。

2012.5.20

吉野ヶ里遺跡 メガン

原発再稼働への隠れ裏?



やらせメール

古川・佐賀県知事の思惑

場に押し寄せる騒動に。2年後には国の特別史跡に指定され、翌年には「帯を」国営吉野ヶ里歴史公園（約54畝）とすることが閣議決

定された。注目度ゆえの、異例の早さだった。

この流れを受けて、当時の井本勇知事は県議会で「神埼工業団地の跡地（約29畝）は、多目的産業用地として活用していく」（93年3月）と答弁。同年9月に「吉野ヶ里歴史公園と調和し、多様な雇用創出等による地域振興を図る」として発表したのが、吉野ヶ里ニュー・テックパーク構想だった。しかし進出企業はなく、その後も中ぶらりんになっていたのは前述の通り。古川知事は、この中心部約16畝にソーラーパネルを敷き詰めようとしているわけだ。

「利用者がない吉野ヶ里ニュー・テックパークの用地は、県としても懸案事項の一つだった。そこに、東日本大震災後の再生可能エネルギーを求める機運があつて、メガソーラー計画が浮上したわけです。もちろん国営吉野ヶ里歴史公園のことも考慮して、できるだけ

メガソーラーの高さを抑えるようにする予定ですし、周囲に植樹するなどして景観を壊さない配慮をします。ソーラーパネルの中には、黒くてキラキラしないものもありますから」（佐賀県農林水産商工本部新エネルギー課・古賀信幸副課長）

県は土地開発公社から33億円で用地を買い戻しており、メガソーラー予定地の造成工事を今年9月いつばいで終える予定だ。この土地を8メガワット（8000キロワット）以上の太陽光発電をする民間業者に、年間1600万円（1平方メートルあたり100円）で貸す。貸出期間は17〜20年で、既に17社から申し出があるという。当初は今年度中に操業開始予定だったが、電力の買い取り価格が最近まで決まっていなかったため設置者が採算性を判断できず、計画がずれこむ可能性が高い。それにしても弥生時代の遺跡はどうなるのだろうか？

前出の文化財課・森田副課長に尋ねると、こんな答えが返ってきた。

「メガソーラーの用地の辺りは、環濠集落の周りに住んでいた弥生時代の庶民の住居跡や水田跡のある場所です。遺跡調査は終わって、出上品は倉庫に保管し、住居跡は写真や図面にして記録保存した。そのうえで、環濠集落に比べれば価値が低いと県に返した場所なんです。残したくないとは言いませんが、欲を言えばきりがありませんからね」

考古学の立場から言えば、工場やビルを建てるために基礎工事が行われるよりは、現在の土地に盛り土をしてその上にソーラーパネルを置くほうが、遺跡の破壊度は少ないという。

前出・新エネルギー課の古賀副課長も「遺跡の上にソーラーパネルを置くだけで、20年後に情勢が変われば、パネルをどけて元に戻せる」と話す。

遺跡の発見者・七田忠志氏が泣く

だが、反対の声は今も根強い。

「反原発の立場としてメガソーラーには大賛成ですよ。でも、吉野ヶ里遺跡にソーラーパネルを並べるのは大反対です。メガソーラーを造りたければ、原発のある玄海町に造ればいいんです」

そう話すのは、医師で県の保健所長も務めた元佐賀

県議の太田記代子氏だ。地元神埼高校の出身で、吉野ヶ里遺跡の発見者として名

高い故・七田忠志氏に日本史を学んだ縁から「吉野ヶ里遺跡全面保存会」の主要メンバーとして長年活動してきた。

「七田先生は、日本史の授業では弥生時代ばかり教える名物教師でした。いつも大きな風呂敷包みを持ち歩



佐賀県提供

いて、中には土器など重要な出土品が入っていました。火事や盗難に遭わないように手元から離さなかつたんです。先生は東京の大学から教授の口もあつたのに、それを断つて高校の教師を続けられた。自分が吉野ヶ里を離れると遺跡が破壊されるかもしれない、と心配されてのことです」と

恩師を偲ぶ。そして「吉野ヶ里は、古代からの歴史が周囲の山々や田園などの景観とともに保存されているから意味がある。そこに、わざわざソーラーパネルを並べる必要はありません」と訴える。

工事現場を訪ねると、遺跡の周辺は、排水管などを設置するためか掘り返している場所がいくつもある。盛り土をして遺跡は守られるといつても、壊れる部分もあるのではないかと思われる。

さらに、古川知事がメガソーラー計画を発表した時期を考えると、その胸中に

は別の思惑があつたのではないかと疑いたくなる。

古川知事が県議会でメガソーラー計画を発表したのは、昨年6月13日。玄海原発を巡る説明番組の放映前、知事が九州電力幹部に「やらせメール」を要請したとされるのが、約1週間後の6月21日である。

「日本一の『太陽光王国』を目指したい」と語つた後、原発再稼働に向けて暗躍していたわけだ。

しかも、再生可能エネルギーに力を注いでいる証拠（メガソーラー）を国営吉野ヶ里歴史公園の隣に設置することで、全国からやってきた訪問客に古川県政のクリーンさをアピールでき

る。古川知事にとってメガソーラーは原発の隠れ蓑にすぎないのではないか。もし、そのために吉野ヶ里遺跡が利用されるのであれば、悲しすぎる。

古川知事のために、別の活用法を考えてみた。

メガソーラー用地は弥生時代の庶民の生活場所だというから、当時の庶民の集落を復元したらどうだろう。国営吉野ヶ里歴史公園

のような見るだけの施設ではなく、堅穴式住居に実際に泊まって生活させる。弥生時代の服を着て、弥生式土器を使って料理を作つて食べる。電気は使わず、夜は真つ暗。明かりは焚き火の炎だけ。弥生式土器や青銅器を作つてお土産にできるようににしてもいいだろう。電気のない時代の人間の生きざまをありありと想像できる学習施設であり、宿泊施設だ。

施設の名前は「ホテル吉野ヶ里」。おそらく玄海エネルギーパーク（九電の原発PR施設。古川知事の父親が元副館長）で、原発の安全性を説教されるよりはるかに人間性を豊かにできる場所になるだろう。

古川康知事殿、一度くらい電気と無縁の世界を創造してみませんか？